



よつば会だより

2024年7月号

発行：毎月1回

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原町 5083-1

TEL 0848-23-8755

よつば会だより5月号の時候の挨拶に、「4月の広島の高気温が平年より5度高い日が多くみられた」と書きました。その後5月は平年に近い高気温で経過しました。6月は梅雨入りを迎えます。平年なら6日ごろに中国地方が梅雨入りするのですが、今年は21日と、かなり遅い梅雨入りとなりました。それでも梅雨明けは例年と変わらない7月20日ごろで、梅雨期間の総雨量は例年と変わらないようです。と言うことは、線状降水帯が多くなるということでしょうか。ほどほどにしてもらいたいものですね。



6月の「よつば会家族教室」から

～オープンダイアローグの効用を出席者に紹介～



6月16日によつば会家族教室を行いました。参加者は当事者2名を含む11名でした。和泉さんの司会の下、最初はいつものように手と口の体操、体と同時に気分もほぐれました。続いて近況報告を参加者全員で行いました。最後に近況報告の順番が回ってきた私は次のようなことを話しました。

6月に入って私の耳の聞こえが一段と悪くなってしまいました。それまでは2メートルぐらい離れた人との会話なら聞き取れたのですが、それが難しくなってしまいました。家族教室に参加しても他の参加者の話がまったくとらえられないという事態の発生です。しかし、家族教室には参加したい。そこで6月の家族教室を前にして、いろいろ考えました。話すことはできるので、近況報告には参加できる。話し合いには参加できないので、私の存在は無視してもらおう。そして、私の家族教室への参加の場として、最後の15分ほどの時間を与えてもらって、私からのメッセージとしての資料を作り、その内容を説明する。それとは別に、近況報告の内容をある程度は知っておきたいので、家内に皆さんの近況報告をメモしてもらおう。その内容が外に出歩くことがないように、私が責任をもってメモの保管をする。

このような私事のようなことをよつば会だよりに書くことはどうかとは思ったのですが、私が家族教室に参加できなくなると、先行き家族教室が続かなくなるのではないかという不安があるからです。そんな心配は必要ない、私が家族教室をまとめていきますよと言ってくれる人が現れれば安心なのですが。

この日の用意した資料は奥田さんが手に入れてくれた、斎藤環さんの著書「**やってみたくなるオープンダイアローグ**」から取った「ひきこもりの人に使えますか」という一文でした。内容は、オープンダイアローグがひきこもりの人にも使えるというもので、よつば会会員の方にも参考になると考えて取り上げました。私が話し終わると司会者から、「いい内容の文章なので、皆さんに伝えてください」との言葉が出されて、資料の一文を配り説明をさせて貰いました。この本を読んで、オープンダイアローグとは何ぞやということがある程度わかりました。この中に次のような文章がありました。

「**変えようとしていないからこそ変化が起こる。この逆説こそが、オープンダイアローグの第一の柱です。オープンダイアローグでは、治療や解決を目指しません。対話の目的は、対話それ自体。対話を継続することが目的です。そうすると、一種の副産物「オマケ」として、勝手に変化(改善、治療)が起こってしまう**」

この文章が、かなりオープンダイアローグの本質についていると思います。近いうちにこの文章の内容をもう少し砕いた記事を書きます。(N.T)

6月の活動報告

09日 当事者との交流会 (サロンよつば)

16日 よつば会家族教室 (市民センター)

7月の活動予定

14日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)

21日(日) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)





～利用できるものは、迷わず、遠慮せず、何でも利用を～ 「おうちで受けられるサービス」 そのII



よつば会だより先月号に、「こころの元気+」誌4月号に掲載されていた特集記事「おうちで受けられるサービス」から記事を書きました。その記事の続きです。

4. 引きこもっている方への支援

国では、「ひきこもり地域支援センター」および「ひきこもり支援ステーション事業」を、都道府県・市町村やNPO 法人に委託する形で行っており、取り組みが広がっています。この事業の中で「ひきこもり支援コーディネーター」と呼ばれる専門スタッフがあります。

5. 行政関連の相談支援・窓口

- ① 障害のある方やご家族の相談支援について、総合的に相談に乗る窓口として、行政では「基幹相談支援センター」を設置しています。相談の中には、ひきこもりやアウトリーチ支援が必要な事例が含まれるため、積極的なセンターでは状況に応じて訪問を行っている場合があります。
- ② 「地域包括支援センター」も行政が設置している高齢者向けの総合相談窓口ですが、いわゆる「8050問題」で高齢者のご家族・お子さんともに支援が必要と分かる場合も多いことから、結果的に訪問支援で対応していることもあります。

以上がよつば会だより6月号から7月号にかけて書いてきた、「おうちで受けられるサービス」の概要です。この7月号に書いた文章が、「状況に応じて訪問を行っている」とか、「結果的に訪問支援で対応していることもある」など、具体性のない表現になっています。さらに、「何を、どの事業で、どの程度行っているかは、自治体によって異なるのですが、市区町村や行政機関では、地元のアウトリーチ支援の情報を(良し悪しを含め)知っていることが多いので、相談してみるのもよいと思います」と、「こころの元気+」誌の読者に丸投げしています。しかし、この「よつば会だより」の文章を読んだ方から、尾道市ではどうなのかと質問をされても答えることができません。そこで考えたのが、「はなはな」に行って桃谷さんに説明してもらうことでした。桃谷さんに連絡を取り、20日に「はなはな」に青山さんと二人で訪ね、よつば会だよりに書いたことについて説明をしてもらいました。桃谷さんは多忙な中、1時間でもお願いした応答の時間を40分を超えても対応していただきました。

21日から桃谷さんに説明してもらったことを、よつば会だよりの原稿化に取り組みました。しかし、説明を受けたときにはうなずいてことが、いざ文章化しようとなると内容が出てきません。メモは取っていたのですが、前後がどういうことだったかがあいまいで文章にする言葉が出てきません。記憶力が低下していることを忘れていました。それでも頭を振り絞って、桃谷さんの話を2点書いていきます。

- 「4.」の「ひきこもり地域支援センター」と、尾道市の「こころサポート事業」は重なりがあるのかとの問いに、桃谷さんは即座に「全然違うものです。尾道市の自殺者が県内でワーストだったなどの状況から、独自に始めたものです」との答えでした。
- 「5.」の①にある「行政では『機関相談支援センター』を設置している」を指して、「これが『はなはな』です」とのことでした。

その他いろんな話が出たのですが、省略します。尾道市のアウトリーチを伴った精神障害者への福祉サービスが利用できれば、家族が安心できる状況がもたらされるのではないかと考えたのですが、あいまいなままに終わりました。さらに資料を求めて努力していきます。 (N.T)